

# 倉橋惣三「保育法」余聞 (3)

## 保育者の自意識

良寛と布袋和尚

土屋 とく

「自ら育つものを 育たせようとする心が保育の心である」とする倉橋先生は、その実際的な保育法の原理を「自発性」と「具体性」の二つに置いている。

そしてこれは子どもをありのままに見つめることにより、子どもの生活そのものから学び、導かれるものである。と講義録の第二章で説かれている。

六十八頁以下

「保育はいかなる様式を取っても良い。人々の特色、またその場合場合の生きた活用をすべきであるが、いかに立派にされたとしても、その方法が自発的になされなければ、その根本原理に違反する。

また、その結果が実に立派であっても、その方法が自発的にあらざれば、それは根本原理に背いた大失敗である。」……と。

そして育てるべき自発性は、子ども自身に備わっ

ている生命力・伸びる力そのものを、いかに良く育て得るかに懸かっていることであり、幼児教育に対するゆるぎない一貫した信念でもあった。

さらに子どもの自発性の姿にふれたあと、大人の側つまり教育者として陥り易い傾向を指摘し、こう語る。

「保母として、良き大体の条件は、自意識の余り強いのは避けたいということだ。

良寛和尚などは、実に無自意識な人の代表だ。」

### 良寛さまと遊び

#### 手鞠をよめる

冬ごもり 春さりくれば 飯乞うと 草の庵を  
立ち出でて 里にい行けば たまぼこの 道のち  
またに 子供らが 今を春べと 手まりつく ひ  
ふみよいむな 汝がつけば 吾はうたひ あがつ  
けば なは歌ひ つきて歌ひて 霞立つ 長き春

#### 日を暮らしつるかも

良寛について我々が先ず思いうかべる姿といえば、子ども達と日暮れまで無心に交わり遊び、真の友達でありえた童心の持ち主というイメージである。

彼の日常の行動を伝えたものとして数々の逸話が残されているが、庵を出て里におりてきた良寛は、待ちかまえる子どもに取り囲まれ、手鞠をつき、おはじきをし、若菜を共に摘み、かくれんぼに興じたという。

○時には子ども達と遊ぶうち、死んだふりをして道に伏したままじっと動かない。子ども等は草や木の葉を体の上に乗せ、お葬式のまねごとをして笑いあう。その内子どものひとりが良寛の鼻をつまんで放さない。遂に苦しくなって彼は生き返ってしまつた。

○また、かくれんぼに興じているうち日暮れが迫

り、子ども達はひとりふたりと家に帰っていったが、いつまでも物陰にひそんでいる和尚の姿をいぶかしんだ村人が尋ねると「シッ そんな大きな声を出すと鬼が見つけるわ」と言った。

○子ども達はぞろぞろと後につきながら、「良寛さま一貫」と言うと驚いてそりかえる。又「二貫」といえば又そる。三貫、四貫、とますますそりかえるうちに、とうとう倒れてしまう有様を見て皆どっと大笑いする。等の日常であった。

こうしたことに対して何故そのようなことをするかと尋ねた人に彼はこう答えたという。

「禪師笑いて曰く、然り、児童は余を驚かすを以て楽しみと為す也、余は児童の楽しむ所以を以て楽しみと為す。児童楽しみ、余も楽しむ。一挙兩楽なり。以て常と為す。真の楽しみのこれより大なるは莫し。」と、禪師の天真をたのしむは、この類也。

『伝 良寛奇話 良寛禪師木鉢記』

倉橋先生の著作及び関連資料の中で、良寛につい

て触れられているものは、この講義録だけであって、記録として残されたものは現在のところ他に見当たらない。

自意識について書かれているこの箇所には、なぜ良寛和尚が、そして並列的に布袋和尚がでてくるのであろうか。

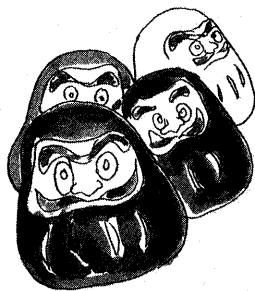
布袋はてさま

「私は布袋が大好きである。あの丸い頭、ふくよかな頬、殊に使々たる蟠腹、いかにも呑気に悠々暢達の様子が、何とも言えず大好きである。……大きな布袋を荷って、長い杖をもつて、いつもにこにこして大勢の子供たちに取りまかれているあの布袋さんである。しかして私の布袋を好むこと年既に久しい。」

大正六年の『婦人と子ども』（『幼児の教育』の前身）六号に書かれ、十五年に幼児教育に対する時々の所感のまとめとして本となった『幼稚園雑

草』の一項に〈布袋讚〉がある。

狩野芳崖に傾倒していた先生は、その遺墨展を見て『慈母観音』にあらためて感動するとともに、図らずももっとも愉快な発見をしたという。それは『布袋唐子遊図』と題された一幅であり「漫々たる便腹をたれて踞座し、五人の唐子がそのひざにまつわって嬉々として戯れている。構図においては普通の布袋図と多く変ったところはない。ただその顔、相好。ほんとに洒々落々として、腹底から邪気的な



い顔つき、ことに子供たちを見て、溶けて流れる様に笑みこぼれている目つき、私は私の好きなものとうの布袋を実にこの作において見出したような気がした。」のであった。

（七福神の一人として親しまれている布袋さまは、中国の禅僧。名を契此と言い常に大きな袋を担ぎ喜捨を求めて歩いて、人の幸せや天気を予知したため人々に喜ばれた。寺で参禅しつつ亡くなったという。日本では神格化され恵比寿・大黒さま等とともに福德円満をもたらす象徴になっている。）

そして布袋に就いての所感を次のように述べている。

「我々教育の業に従事するもの、ことに幼児の教育に従事するものは、その計画においてくわしく、所期において密に、責任を感じる敵に、すなわち大に細心でなければならぬ。これがためには種々の研究もしなければならぬ。……研究者としてはその学問に対して、すこぶる神経質でなければならぬ。また

實際教育の上にも自分の實際していることに、絶えず精緻なる反省を施し、深刻なる批判も加えてみなければならぬ。……しかし子供に直接接するにこの神経質をもってしてはならぬ。神経質はもっとも常に相手を神経質にする。しかし子供はもっとも神経質でないものであって、また神経質にされてはならぬものである。」

「子供は抱かれようとする。包まれようとする。酔わされようとする。また、そうしてやらなければならぬものがある。それでなくては子供は伸びない。育たない。生きない。すなわち我々は、研究者、反省者としては神経質であっても、子供に接するものとしては、もっとも非神経質でなければならぬ。しかししてこの注意はことに現代の教育において一層必要である。」

「こう考えて来て、私の心はいつでも布袋に来る。ああ、あの大きな腹。布袋はあの大きな袋の中に一切の所有品をいれているのだということであるが、

あの大きな腹には一層多くのものを入れてあます所はあるまい。……だから、いつでも悠々として迫らず、嬉々としていきどおらず、教うるよりも共に遊び、共に遊ぶよりも子供らをして我において自らよく遊ばしめるの大教育が、つとめずしておのずからに出来ている。むべなるかな。布袋のある所、群児の必ず喜々として追隨するや。……」

### ひとりの時の自意識

良寛と布袋について語る講義録のこの箇所は、僅か三行に過ぎないが、実際の講義の中ではかなり詳細な説明がなされたのではないかと推測される。なぜなら見落としてはならないのは、次の文章であり、その内容についてである。

「良寛和尚も、ほてい様も、一人でいる時は、実に深刻な自意識が働いていたのである。」

つまり無自意識の代表としながら、つづけて両者について「ひとりの時は」と対比させているこの論

法のなかに、看過することの出来ない重要な保育者の心構えが含まれていると考えられるからである。

それは既に「布袋讚」の引用からもわかるとおり、日常子どもに接するこちら側の態度や心の持ちようと、保育の「時」そのものから離れた保育者の在るべき姿勢について挙げられているいくつかの警告との関連である。

すでに神格化されている布袋については、人間が希求する理想像が描かれていると言つてよいかもしれないが、良寛については、その実像を語る資料は多く残されており、なぜ倉橋先生がこうした発言を付け加えたのか推論することは可能である。

うらかな春の陽の中で子どもと戯れる好々爺としての良寛ではあるが、彼が出雲崎の名主見習として挫折のうちに若年で出家し、長い修業と心の変遷をへてこの境地に至ったこと。また生涯を独り身のうちに置いて、禅の道に、漢詩に、和歌に、書を究めることに没頭したことはあまり一般には知られて

いない。

よごれ、ほつれた僧衣をまとい托鉢に歩く傍ら、いつも持ち歩いている自作の手鞆やオハジキで子どもと無心に遊ぶ良寛。そんな彼が庵に帰ってただひとり思う心を表した詩がある。

生涯、身を立つるに懶もろく

騰々、天真に任まかす

囊中、三升の米

爐邊、一束の薪いっさく たきぎ

誰か問わん、迷悟の跡

何ぞ知らん、名利の塵

夜雨、草庵の裡もも

雙脚、等閒に伸ばす

雪深い五合庵に梢をわたる風の音のみの静寂の中の彼の姿。これもまた彼の真の姿でもあろう。

また、「行燈の前に読書する圖」と書かれた良寛



◀ 「良寛さまと毯」の像（新潟県）

（平成五年十月 筆者撮影）

の自画像があり、その右に

“よの中に交じらぬとにはあらねども

ひとり遊びぞ我はまされる” と。

この歌の解釈について、北川省一は複雑な内容が考えられるとしながら、世間一般の人々との交渉よりも、むしろ良寛が愛したのは子どもたちの世界であり、或いは子どものように無邪気な心情ではなかったかとその著書のなかで語っている。

しかし最晩年に詠んだ

“裏を見せ表を見せて散るもみじ”

の句は自然と一体になった彼の心ではあっても、深いところで哀しい。

子どもと布袋と

良寛が人の求めに応じて書いていたいくつかの「戒語」のなかで子どもの教育に関するものとしては、

「一、子どものこしゃくなる」

「一、子どもをたらかしすかしてなぐさむ」

があるが、この二つのことばは必ず洩らさなかつたという。

子どもが子どもらしい純真さに欠け、生意気な態度をとることは好ましい事ではなく、また大人が子どもをたぶらかしたり、だましたりして困らせ、そんなようすを見て笑う等ということは良寛にとつて絶対に許せない行為であつた。

彼の残した多くの書の中に、布袋を詠んだ偈（仏徳または教理を讃美する詩で、四句よりなる）に布袋を描いた自画自賛のものがあつた、

朝あしたに布袋を弄し 暮るるも布袋

弄もし来り弄もし去つて知らず幾と辰となるを

南無婦命 老布袋

天上天下唯一人

この他にも布袋との関係が深い。

人々が良寛の姿や生き方のうちに布袋を見、彼もまた、自身を布袋に重ねて考えていたのではないかと言ふことは興味深いことである。

良寛の徳を慕いその研究も膨大な数にのぼるが、彼を一般にひろく知らしめ、今も尚名著とされる相馬御風の『大愚良寛』が刊行されたのは、大正七年のことである。

倉橋先生の該博な視野のなかには、良寛も布袋様も、充分に内部の検討を経て評価されていたのではないかと思ふ。

そうであるからこそ、保育者の自意識について説明をするあいだに、典型的な無自意識の人物像として良寛の名をあげ、それにつづけて一見矛盾するかにとれるひとり居ひたりいの心のうちを、さりげなく話題にだしたのではなからうか。



## 育てる者として

子どもの生命力としての自発性を保育法の第一に挙げ、育ちゆく姿に〈おどろく〉ことの大切さを、その自発にひきずられていく楽しみを、干渉のしすぎをいましめることを先生は先ず説く。

そして大人に自発性が少ないのは、その自発性を妨げる何らかの気持ち働き、教育者としての効果意識、過剰な自意識、神経質な言動はけっして子どもにとってプラスにならないことを戒める。

子どもと共にあること。子どもと遊び、子どもとこちら全体が解け合い、共鳴しあってもよきだけ温かく快いハーモニーこそ保育者の目指すものである。

一方〈布袋讃〉に書かれてあるように、子どもと離れた時に要求される細心な配慮を欠いてはならず、保育者はその為の多面的な努力を重ねるしかないのではなからうか。

“人の身はならわしものぞ子どもらそ

よく教えてよねざらいますして 良寛 “

(洗足学園短期大学)

## 参考文献

- 倉橋惣三「保育法」講義録 68～81頁 他 フレーベル館
- 倉橋惣三選集 第二卷 37～40頁 フレーベル館
- 大愚良寛 相馬御風著(渡辺秀英 校注) 考古堂書店
- 唐木順三全集 第十三卷 良寛 筑摩書房
- 良寛 [上] [下] 井本農一 講談社
- 良寛その大愚の生涯 北川省一 東京白川書院
- 春秋321. 322. 永遠の人 良寛 北川省一 春秋社
- 良寛 吉本隆明 春秋社 他